

月刊

GPP



Vol.67

令和3年5月号

株式会社
グロースパートナーズ

Great Resetなのだ

もはや、コロナとカーボンニュートラルの話題が出ない日など、無くなってしまった。コロナはつい1年2ヶ月前、カーボンニュートラルにいたってはここ半年ぐらい前の菅首相の所信表明からだ。

兎に角、2050年にはカーボンニュートラル社会を実現するというのだ。パリ協定では「21世紀後半にはカーボンニュートラルを実現する」と提唱されているが、中間地点でそれを達成しようというのだ。ご本人は恐らくその頃にはこの世にいらっしやらず、「がんばってねー」というところか。

これは間違いなく無理難題だ。排出権市場やカーボンクレジットは、数字の捉え方で如何様にも姿を変えてしまう代物。勿論、一定の理論と整合性はあるが、真にカーボンニュートラルを成しているかという疑問が残り、ある種の排出者へのプレッシャーとしての効果が大きいように思える。例えば、EV車。確かに走行時のCO₂排出量はゼロになるが、リチウム電池製造でどれだけのCO₂が排出されているか実は考慮されておらず、むしろそのツケを電池製造業者に負担させる勢いだ。

今年のダボス会議のテーマは“The Great Reset”。カーボンニュートラルのような無理難題を解決する為には、既存の枠組み、しがらみは一回取っ払ってみようというものだ。日本の複雑怪奇な産業構造に常日頃から疑問を持っている私としては、言ったからと言って実現出来る“打ち出の小づち”では無いのを百も承知ではあるが、それでも乱発している。響きも好きだ。

一方、先日、とある著名な方から「日本人はRESETには抵抗感があるから、こちらの方が良いよ」と教えて頂いたのが、Just Transition (公正な移行) であった。確かに、日本人好みの意味合いだ。ただ、インパクトや意味の浸透度合いを考えると、Great Resetの方がより鮮明であるように思える。

マレーシア華僑の友人が、大手外資系の日本支店に着任して2年が過ぎたが、来月に急遽帰国することになった。職場のいじめ、サボタージュにあっているとのこと。シンガポール、マレーシアで抜群の成績を残して、満を持しての赴任であったが、残念なことだ。“これが日本の全てだ”と言うつもりは毛頭ないが、やはりこの国にはGreat Resetが必要に思えてならない。

藤井 成厚

資源の有効活用

地方の生コンプラントにお伺いすることがありました。ポンプ戻しなどに抵抗感なく残コンを持ち帰っているようですが、困っていることに変わりないようです。最近では、有償化対応で処理できているようですが、それにしても費用が掛かりすぎていて経営を圧迫する問題のようです。

現場で余剰になった生コンクリートを現場で扱いやすくする技術として、セルドロンは有効です。セメントや生コンの資源にも限りがあります。

最近では、カーボンニュートラルというような脱炭素社会にむけて単語が飛び交っていますが、コンクリートも二酸化炭素を排出して作られています。

限りある資源を現場で有効活用するためにも、セルドロンをご検討ください。

生コンにセルドロンを混ぜると流動性がなくなります。

混ぜ方によっても形状が変わります。

攪拌方法の違いによる形状の差異



①角スコップ攪拌確



②ポンプ車ホッパー攪拌



③生コン車ミキサー攪拌

粒度分布試験などは実施せず目視確認のみですが、①・②は「改良土」に近い粗骨材と細骨材にセメントが多少付着しているような状態。

③は、粗骨材が少しおおきくなるような状態。

粗骨材の周りをモルタルがコーティングしているような状態。

セルドロンの大規模工事で採用!?

最近では、生コン用途での活用が多かったですが、土壌用途での問い合わせがありました。試験施工を実施した結果、**200t/月**以上も利用するようで、この現場が決まると現場におけるセルドロンの出荷量を更新いたします。

セルドロンは、土壌の改質を行うための補助剤になるようです。

今まではセルドロンで改質を完結していることが多かったですが、前処理のような使い方になります。このようなケースは、福島県二本松市で放射性物質の土砂撤去するためにセルドロンを100t以上活用いただいた案件が1度あっただけです。

現場では、様々な事情により施工方法が決まっていくと思いますが、セルドロンは汎用性が高く、低環境負荷性の材料です。ぜひ試験的でも採用をご検討ください。